

# Panhispanismo とは何か —アカデミア協会の歩みから考える—

安達直樹

## 1. はじめに

Real Academia Española スペイン王立アカデミア（以下、RAE）の300年の沿革において最大の革新といえるのは、今日、その創設の標語「(言語を) 清め、定め、輝きを与える」に端的に示される、言語に関する規範と権威の指向から、“pluricentrismo”「多重心的規範」の概念の下、多様性の尊重や平等主義に基づく言語記述へと、機関の根幹となる思想に転換が見られることである。スペイン語の規範の多元化に伴って、今世紀RAEとAsociación de Academias de la Lengua Española スペイン語諸国のアカデミア協会（以下、ASALE）は、新たに“panhispanismo”「汎スペイン語圏主義」をその言語理念の核に据え、これを広く精力的に具現させている。

本研究は、この“panhispanismo”（以下、Ph）がいかなるものか、発生と発展の経緯についてRAE史の概観、特にASALEの創設の経緯に主眼を置きながら考察する。Phの概念については、文法書などの様々な媒体に表明されてはいるものの、語義的にも複数の解釈が可能であり、この理念をどのようなものと捉えるかという本質的議論の余地がある。

## 2. Phの形成

Phは、RAEとASALEの歴史の中で形作られ、発展してきた概念である。ここでは、世紀ごとにこの歴史を観察する。

### 2. 1. 18世紀 —RAEの創設とカスティーリャ語の強化—<sup>1</sup>

18世紀は、RAE創設の経緯を中心に見てみよう。RAE創設の目的は、『創設と規約』（1715）に記されている：「カスティーリャ語の純正と優美を可能な限り涵養し定める名目で設立された」。それは、“Limpia, fija y da esplendor”「(言語を) 清め、定め、(これに) 輝きを与える」の標語に刻まれている通りである。また、1726-39年に刊行されたいわゆる *Diccionario de autoridades* 『模範辞典』は、優れた作家に倣ってことばを使用するためのもので、まさに規範を提示する手引きであった。RAEは続けて正書法（1741）および文法書（1771）を上梓するが、それぞれの序文で、「カスティーリャ語の正書法を確定し、実際の使用において画一性を獲得する」、「広大な領土の遍くすべてに、(…) このカスティーリャ語は共通のものである」と述べて、規範化による言語の画一化を目指す方針を明らかにしている。

この時期には、単一言語化政策が急速に進められる一方で、カスティーリャ語の方言・多様性やスペインのその他の言語についても一定の配慮があったことが様々な事例の中うかがえる。規範の集積であった『模範辞典』は、その編纂にあたり、カスティーリャ語の方言的要素やアメリカ諸国の語彙も収集するなど、既定概念的なカスティーリャ語純粋主義の性質をそれほど強くは帯びていなかった。また、RAEの創設者をはじめとする会員の出自は、カスティーリャ以外にも、カタルーニャや純正なカステ

ーリャ語地域とみなされないナバラなどの地方でもあった。さらに、形式的であれ、機関の庇護者たる国王がフランス語を第一言語としていたことなどについては、Consejo de Castilla カスティーリャ評議會を急先鋒として、RAE の正統性や権威を否定する外部からの圧迫もあったほどである。<sup>3</sup>

一方、RAE の文法書は、18 世紀中は初版から第 4 版 (1796) までを数えたが、そのいずれも言語の均一性や統一性をまだ問題とせず、したがって規範性は低かったとされ、文法のあらましを教える教材としての性格が強かった。明確に規範を提示しない当時の文法書の態度は、会員たちの文法理論を一つに集約することが困難であったことが最大の原因とみられる。

以上のように、この時期のスペインが、国内の他言語や多様性に対して比較的寛容であったことや、スペイン語の画一化がゆるやかであったことはあまり知られていない。穿った見方をすれば、文法書編纂の過程も含め、多様な価値観の存在を認める現代 ASALE のスタンスは、この揺籃期にすでに胚胎していたと考えられるかもしれない。しかし、この時点でまだ Ph という思想は、種子の段階であった。

## 2. 2. 19 世紀 — 諸国の独立と規範の独立 —

19 世紀は、スペインにおいてスペイン語の地位が一層強化される。1821 年には公教育法が施行され、教育言語としてスペイン語を優先することが定められた。一連の教育に係る法整備のうちで、1844 年には *Ortografía de la lengua española* (以下、ORAE) が唯一の正書法教材とされ、全国でその使用が義務付けられている。57 年には義務教育が開始されるとともに、文法書および正書法が RAE によるものに統一され、RAE は初等および中等教育用の教科書も刊行し、公教育に本格的に参与することとなった。

一方、この世紀は、メキシコ (1810) を先頭にスペインの植民地が次々に独立する時期でもある。植民地の独立が、スペイン語という言語にもたらした影響は甚大であった。国家の独立は、文化や価値観の独立をも意味し、言語規範についても多元化することは必至であった。

それはまず、主にチリで活躍したベネズエラの文人 Andrés Bello の功績によってもたらされる。1823 年には、政治的にも文化的にもスペインから脱却することを目指していた Bello らが正書法の改革案を提示したが、RAE はこれを拒絶し、<sup>4</sup>スペイン語に関し異なる規範が並立しうる事態となった。さらに、1830 年にはスペイン人 Vicente Salvá の文法書がスペインおよび中南米で出版され、<sup>5</sup>ベネズエラ、チリおよびペルーで公教育の教科書に認定されるなど、著しい成功を収めた。Salvá は RAE の理論の古風さや、その文法書の改訂が遅々としていることに対し、自ら文法書を著して「暗黙に対抗」したのである。<sup>6</sup>こうして RAE の排他的な権威はにわかに揺らぎ始め、これ以降、スペイン語の規範に関する異論や疑義が発現することになったが、その最たるものは、やはり Bello の著作であった。

1847 年、Bello は *Gramática de la lengua castellana destinada al uso de los americanos* を上梓した。これは、「アメリカの人々の使用に向けたカスティーリャ語文法」を表題に冠している通り、スペインから独立したアメリカ独自の規範を制定することを切望する Bello の信念を示す文法書であった。彼の場合

は、非 RAE であるだけでなく、明白に「スペイン」をアンチテーゼとしていた点で、一層その存在は RAE にとって脅威であったはずである。

この新たな二つの文法書によって、RAE の地位の低下は不可避となった。スペイン一国内で唯一絶対であった規範が、言語を同じくする諸国との間で相対化したのである。こうした新興の勢力と RAE は、一時反目し合い、両者の間は決裂しそうにも見えたが、後者はその態度をしだいに軟化させていく。1851 年、RAE は Bello を名誉会員に迎え入れ、1870 年にはスペイン以外のアカデミアの創設を決定する。<sup>8</sup> こうして、1871 年のコロンビアを筆頭にスペイン系諸国にアカデミアが矢継ぎ早に誕生し、<sup>9</sup>これらがスペイン語の将来、特に Ph の行く末を担うものとなる。

しかし一方で、この各国のアカデミア創設に際する *Estatutos* 『規約』では、これらと RAE との関係が明確に示されている。そこでは、RAE が会長職の独占や姉妹機関を含めた会員の選出、常任委員会の構成、『規約』の変更といった排他的権限を有し、他のアカデミアとの間を埋めたい溝が隔てていた。

### 2. 3. 20 世紀 —スペインからスペイン語圏へ—

前世紀に始まったアメリカ諸国との交流は、1951 年メキシコで初めて開催された Congreso de Academias de la Lengua Española スペイン語アカデミア会議を端緒にこの世紀後半に深化していく。<sup>10</sup> この会議で、RAE と各国アカデミアが『アカデミア協会』(ASALE)を組織することが決議され、これが 1960 年の第 2 回会議(コロンビア)を経て、1961 年に正式に発足することになった。これに合わせて協会の『規約』も大幅に改められ、スペインの特権の大部分が見直され、その優位は是正された。

またこの間、のちに会長を務めることになる Dámaso Alonso 氏は、*Unidad en defensa del idioma* と題する講演の中で、19 世紀は言語の純正さを保つことが RAE の主たる関心事であったが、20 世紀は言語の "unidad" 一体性の維持が主題となると述べており、スペイン語の分散に対する危惧を表明している。これは、まさに 1 世紀前に Bello が憂慮していたことに他ならない。<sup>11</sup> 平等主義に基づく言語の多様性の尊重と、規範の多元化の容認は、常にその分散や一体性の瓦解に対する憂慮と表裏一体であった。

さらに、のちに Ph の概念へ発展することになる、RAE と ASALE の新たな言語理念が形をとり始める。ORAE (1999) は、22 のアカデミアすべてが校閥に参画した共作であるが、RAE 創設以来の標語 "Limpia, fija y da esplendor" を "unifica, fija y limpia" 「(言語を)一つにし、定め、清める」と改めるべきことを序文で示唆しているように、スペイン語の "unidad" の保持を強くうたえている。他方、同年の *Gramática descriptiva de la lengua española* は、語圏全域の多様な様態を記述する、初めての文法書であったといえ、これがのちの *Nueva gramática de la lengua española* (2009) (以下、NGLE) の下敷きにあることは容易に想像できよう。

この間の RAE の舵取りは、Victor García de la Concha 氏に委ねられており、Ph の発展はこの個人の存在によるところが非常に大きい。これについては、次章で詳述する。

## 2. 4. 21 世紀 —ASALE の発足と "Panhispanismo" の内実化—

Ph の概念は、すでに見てきたように、ASALE の歴史とともに発展してきたものであるが、この語は RAE の辞書（以下、DRAE）や *Diccionario panhispánico de dudas*（以下、DPD）にも RAE のウェブサイトにも記載されていない。この語が用いられるのは、主に "política (lingüística) panhispánica" (RAE:HP) などというときの形容詞の形であり、<sup>12</sup>DRAE (2001) では、「スペイン語を話すすべての人々に属し関係する」状態（状況）と定義される。<sup>13</sup>

いずれにしても、この Ph の語はいつから RAE の主要な理念を表すことばになったのか。これも、やはり 1998 年から 2010 年まで 3 期にわたり会長を務めた García de la Concha 氏に起因するところが大きい。彼は、在任中もその後も新聞や雑誌のインタビューに対し、Ph について積極的に語っている。そのいくつかを見ると、<sup>14</sup>彼は会長職に就くにあたり、前会長 Lázaro Carreter 氏から RAE が直面していた財政問題と「アメリカ問題」を託されたという。アメリカ諸国との関係強化は、前会長個人の悲願でもあるが、語圏一体化の意識はこれ以前にすでに具体化されており、時勢に適うものでもあった。次に、この概念が最も明白化したのは、ORAE (1999) の出版のときである。この正書法の書は、すでにふれたように、初めてすべてのアカデミアが校閲・修正に携わり、22 のアカデミアの名が同時に載せられた初の書物である。氏の回想によれば、その出版発表の場で、当時チリアカデミアの会長であった Alfredo Matus 氏が「真の意味で panhispánica な作品になるためには、すべてのアカデミアが執筆の最初の段階から参加すべきだ」と発言し、De la Concha 氏がこれを自身の言語理念の支柱とすることを決めたという。こうして見れば、Ph の思想は、名はなくともすでに物理的に現れ始めており、それが反対に思想をさらに純化させることになったと考えられる。また、同氏は 2000 年には、「言語はコミュニケーションの手段であるだけでなく、高次の融和の下、我々に共通の祖国を与えてくれる」と述べて、汎語圏主義の考えを明確に表明している。ここで興味深いのは、20 世紀という時代には、言語の分散を食い止め、"unidad" 一体性を保つことが RAE の第一義であったが、その終局において、Ph という新たな思想、すなわち「言語“による”一体性」という概念が生まれ出たことである。

2005 年には、RAE・ASALE の名で *Diccionario panhispánico de dudas* が出版されたが、これに際して De la Concha 会長は、これが全アカデミアの共作であることを明言し、協会の結束を顕示している。この辞書は、規範性が比較的高いとされ、序文では「相互理解を妨げる特異な方言的要素は推奨されない」と述べてもいる。しかし、それは、スペイン語圏の全話者が「困難なく理解し合い、同一の言語共同体の一員であることを認め合うことを可能にする」ような「共通のコード」を設定するためであり、言語の一体性および言語による一体性の創出を期すためである。このように、DPD は、ORAE (1999) で萌芽が見られ De la Concha 氏によって推進された Ph が物理的に結実した最初の書物である。

2007 年には協会規約が大きく見直され、「アカデミア協会の本質的な目的は、スペイン語話者の共同

体が共有する最も豊かな遺産であるスペイン語の一体性、完全性とその発展に資する働きをすることである。そのために（協会は）、汎スペイン語圏主義の言語理念を推進する」という条項（第7条）が加えられる。この新たな規約により、協会運営上スペインが堅持していた優位性が基本的にはすべて取り除かれ、協会内のスペインーアメリカの序列の構造は解消したように見える。

さらに、2009年刊行のNGLEは、Phの理念が最も鮮明に表現された書であるといつてよい。NGLEは、RAEがHPでPhとともに用いている"Unidad en la diversidad"「多様性の中の一体性」という表現を繰り返し、忠実にその概念の実体化を試みたものである。それは、「規範は今日、多重心的性質を持つため、「ある一つの国や共同体のスペイン語を、スペイン語圏全体の言語モデルとして提示することはでき」ず、多様性を重んじる文法書の記述や編集のあり方は、「スペイン語の統一性を脅かさないどころか、むしろそれを強固にするのに貢献」すると述べている通りである。<sup>15</sup>ここで用いられる"panhispánico"は、「言語モデル」すなわち規範について言及したものであることに注目したい。

また、ORAE (2010:XL)も、「正書法、綴りは言語の統一性を保証する柱となるもの」と序文で言明する一方で、「例証は異なる国々のサンプルを収集するよう努めている。この書は、一体性から発し一体性へ向けて思案され制作された」と述べて、上のNGLEの理念をなぞっている。

以上のように、Phは20世紀後半にその萌芽が見られ、これがASALEの協調と、スペインー非スペインの関係の水平化を経験しながら、辞書(DPD)・正書法・文法書という物理的成果をともなって、一つの強固な思想へと昇華したといえる。加えていうなら、Phが描く「一体性」は、スペイン語圏が同一言語の名の下に想像しうる共同体の意識であると同時に、ASALE協会の組織としての一体性・結束によってもたらされるものでもあった。

### 3. Phへの疑問

今世紀さらに飛躍を見せているPhであるが、この語の表す意味は、上述の歴史とそれを体現する書物の性質から考えると、何か釈然としない。この概念の不透明さをいくつかの観点から見出してみよう。

#### 3. 1. 語の両義性

先に見た通り、「panhispanismo」という名詞自体はDRAEに記載されず、形容詞だけが存在する。RAE・ASALEの書物の中で、この形容詞の周辺に説明的に併記される概念（表現）は、「unidad」（言語の一体性）であったり「pluricéntrico」（多重心的規範）であったりする。Phの精神を基調とする書物やHPなどの媒体は、一方で「共通の規範を定める」（HPとDPD）という“統一への志向”を示しながら、他方では、多様な言語様態のすべてを包括的に優劣をつけずに扱う（NGLE）という“平等への志向”を示している。すなわち、Phとは、語圏全体に広くいきわたる①規範であるのか②記述であるのか、という点が明瞭でなく、両義的に捉えられうるわけである。HPの文言やDPDに代表される前者の立場は、語圏すべての変種には、共通の核つまり統一規範があり、スペイン語の一体性はこれによって担保

されるとする、いわば求心的 Ph である。反対に、NGLE が最たるものである後者の立場は、すべての地理的様態は、そもそも同じスペイン語の変種であり、それらの間に優劣の差はなくどれも等しく規範的であるとする。これは、核となる規範の共有よりも表層レベルでの平等の方を選択し、多様化を擁護・推進する、遠心的 Ph と呼ぶことができよう。

そして、この二つの立場は、同時的に並立・対峙する概念というよりは、時系列的に位置づけられると思われる。ASALE 誕生の経緯の中で RAE はそれを主導し、協会の盟主然としていたが、それには自らが主体となって語圏共通のルールを提示しようという意思が鮮明に表れていた。Bello らの正書法案の拒否や、協会規約における特権の保有などには、自らの起源に対する自負と責務の念がうかがえる。これが、ORAE (1999) や DPD の編纂における ASALE の共同作業を経て、協会内のスペインとアメリカ諸国の関係が水平化していく中で醸成された新たな理念、すなわち平等主義の Ph に置きかえられたのではないか。またこの Ph の発展は、De la Concha 氏個人に帰せられる部分も大きいと思われる。

### 3. 2. 文法記述と理念のギャップ

次に、Ph の思想とその現実の間にも、ある種の乖離をみとめうる。Ph と同義的に語られている "pluricentrismo" (規範の複数性) がどの程度確たるものか、実際の文法書などの記述に照らして考えると、その不安定さが少なからず露呈する。

いわゆる "pluricentrismo" (ASALE のいう "policentrismo") は、同一言語に唯一の規範を設定するのではなく、複数の規範の存在を認めるというものである。しかしながら、これを実践することは容易ではなく、特に規範性を自らの特徴とする DPD のような書物にあつては、その趣旨と合致しない。そこで、言語使用の良し悪しを明示的に記述するために、安定的な規範が暗に求められることになる。スペイン語について最も長く規範を定めてきたのは、当然ながら RAE であり、言語文化の伝統もスペインのそれが最も深く重層的である。この RAE の伝統の重み (あるいはアメリカ諸国にとっての呪縛) が、辞書や文法書の記述をスペイン的なものに傾斜させ、ときにスペインのアメリカに対する優位を示唆しかねない。Méndez García de Paredes (2012:296-299) は DPD の記述を分析して、loísmo や laísmo などの中南米の表現・用法が、不当に不適切であるかのように印象付けられる例をいくつか提示している。

規範を定める際に古典の不動性に範を求めることは、RAE・ASALE にとっても当然採られるべき方法の一つであっただろう。古典的な権威への回帰は、行き過ぎると規範の多重性を反故にしかねないが、これはまさに 19 世紀、Bello が陥った矛盾である。<sup>16</sup>

次に、語彙や文法の用例の収集方法も、"panhispánico" (汎スペイン語圏的) かどうか。DPD は、先述のように ASALE が初めて本格的に共同で取り組んだ辞書であり、各国アカデミアが語彙を提出し校閲したものである。これに対し DRAE の方は、各国・地域から語彙の収集を行うものの、その取捨選択は RAE の専門の委員会に委ねられており、<sup>17</sup>事実上 RAE 単独の著書である。RAE・ASALE は、辞書、

正書法の書、文法書を規範の三大柱としており、後二者を共著としているにもかかわらず、辞書についてはまだ実質的にそうはなっていない。機関として掲げている Ph と、機関の第一義的使命とされる辞書の編纂の間に、まだ不整合があると言わざるを得ない。

さらに、NGLE に顕著な、多様な変種の包括的記述は、「平等的」というよりも「無差別的」ということばを連想させる。局所的にしか見られない語法・語用も並べることによって記述の量は大きくなるが、穿った見方をすれば、これをもって記述の精度を脚色し、あるいは多様性の尊重という平等主義をも装ったのではないか。また、現実を余すことなく書き表すことが実践性の高さにつながるかどうかという点にも、疑いの余地がある。現実性と実践性とは必ずしも同義ではなく比例するものでもない。

### 3. 3. 規範の“融解”と“補填”

前項で述べたことと関連して、同一言語の規範の多元化は、その反面、規範の散逸を招きうる。事実、NGLE をはじめ、ORAE (2010)、DPD でさえも多様な変種を前に断定的な語調を避け、複数の語用を認め並列する箇所が散見される。<sup>18</sup>それについては、NGLE に先立って ORAE (1999:XV) が、「(人間の) 集団は、個人と同じ正確さをもって規則に準ずる振る舞いをすることができない」とし、人口 4 億を超える超国家言語を単一の規範に帰すことは不可能であると、諦念気味に仄めかしている。また NGLE (2009:XL) も、「文法分析においては、複数の対立する解釈が支持されることが多々あるが、必ずしも一つだけを選定するわけではない」とし、地理的変種のみならず、協会内の様々な学説にも配慮があることを示唆している。無数の変種を無差別に扱う Ph は、規範性に背反し、記述の明瞭さにとっては障害となりうる。ASALE は、一体性や平等性を標榜しながら、その困難あるいは弊害にも無自覚的ではない。

利用者の便宜にも無関心ではなく、おそらく上述のような批判も受けて、より手早く語法や表現法の正誤が分かるように、*El buen uso del español* 等のコンパクトな規範・用例集を刊行して、NGLE に欠ける明快さ、単刀直入さを補っている。その序文に当たる「紹介」の中では、NGLE が「基本的に記述的でありながら、規範の面でも非常に多く寄与」したとしながら、それとの対比において、同書は「何よりもまず言語規範の書である」ことを宣言している。<sup>19</sup>さらに、規範の手引きとして、「早く短時間で調べることができ、解説も直観的で分かりやすく」編まれていることを同書の最大の性質としている。

### 3. 4. 序列は解消したか

RAE・ASALE のこれまでの歩みを見る限り、アカデミア間の関係は、旧植民地支配の名残を思わせるような序列から、いかにも今日的な平等へと変化した。それは確かに、文法書の共同編纂や規約の改定などの内実をとまなう変化であった。しかしながら、RAE・ASALE 間の対等性は、最も目に見える形で、不完全性を露わにしている。それは、逆説的ではあるが、NGLE などの一連の書物が、まさに RAE と ASALE の共著であり、両者が並列に表記される点においてである。RAE は ASALE を作りその一員

となりながら、現実には今もその枠外にある。つまり、自らの指導下に誕生した協会に長として座るだけでなく、超絶的な庇護者としての立場をも維持しているように見える。"RAE y ASALE" の表記は、見方を変えれば RAE の個別的表記でもあり、その独立性を浮き彫りにする。協会の融和と協調を象徴するはずの表記が、皮肉にも、その一体性が最終的的局面で成立していないことを暗示してしまうのである。

そして、それは現実でもある。ASALE には組織の執行部として常任委員会が設置されており、その委員長は ASALE の会長であるが、RAE の会長がこれを務めることが規約で定められている。<sup>20</sup>さらに、委員会の構成も RAE のみが常駐委員を置き、それ以外の委員は 2 名以上がアメリカ諸国のアカデミアから交代で選出されるという、不均衡な仕組みの上に乗っている。

このように見れば、Ph の中心にある "policentrismo" は、それを実行する組織の性質についてはあてはまらず、そのことが結局は規範を提示する書物のありようにも反映されると考えられる。

#### 4. むすび

Ph の理念は、以上の考察から、規範（統一）志向よりも平等志向の方へ大きく傾斜している。これは ASALE の歴史を見れば、その延長線上にある極めて自然な成り行きであるように思える。

記述の問題は、規範との両立・均衡を考慮して、他のハンドブックなどで一定の解決が図れるが、この点は、昨今、スペインの政府機関であるセルバンテス協会との協調も目立つ。両者の関係は、今後ますます密となり親和性を増すだろう。これについては論を改めたい。

最後に、RAE の実質的な独立性・超越性は、無論その起源性に理由を求めうる。したがって、"RAE y ASALE" の表記は、両者の主従関係ではなく、むしろ“遺伝的”（派生的）関係を示すものである。この関係は根絶的で解消しえないが、ASALE 内の調和には、将来にまだ進展の余地があるだろう。

#### 註

<sup>1</sup> 言語名としての「カスティーリャ語」の使用は 18 世紀などに多いが、本稿では出典での使用を尊重しながら、基本的には「スペイン語」を用いる。

<sup>2</sup> López Morales (1995).

<sup>3</sup> 国内他言語への配慮は、この後 1918 年のバスクのアカデミア創設に際して国王 Alfonso XIII がその創設者になっていることにもみとめられる。Lodares (2002:98).

<sup>4</sup> Senz (2011:109-111) に詳しい。

<sup>5</sup> *Gramática de la lengua castellana según ahora se habla*.

<sup>6</sup> Gómez Asencio (2009:4).

<sup>7</sup> その後 1861 年からは“miembro correspondiente”となる (RAE ウェブサイト)。無論、スペイン人以外の会員選出はそれ以前にも行われている。López Morales (1995:4) に詳しい。

<sup>8</sup> Academias Correspondientes と呼んでいる。RAE ウェブサイト参照。

<sup>9</sup> エクアドル(1874)、メキシコ(1875)、エル・サルバドル(1876)などがこれに続いた。その後のアカデミアの開設については Lapesa (1996:234) を参照されたい。

<sup>10</sup> のちに RAE は、この会議が現代の "Panhispanismo" の萌芽であったとしている。

<sup>11</sup> Bello および ASALE の発展については拙稿 (2014) も参照されたい。



- 12 新聞記事などでは名詞の使用も見られる。
- 13 "Perteneiente o relativo a todos los pueblos que hablan la lengua española." DRAE (2001).
- 14 ウェブサイト *Lecturas Sumergidas* におけるインタビューに詳しい。
- 15 NGLE (2009:XLII) "No es posible presentar el español de un país o de una comunidad como modelo panhispánico de lengua.", "Obrar de este modo no solo no pone en peligro la unidad del español, sino que contribuye más bien a fortalecerla, y ayuda a comprender su distribución geográfica de forma más cabal."
- 16 これについては拙稿 (2014) で論じる。
- 17 Comisión Delegada del Pleno y para el Diccionario. この委員のうち、スペイン出身でないのは、ASALE の Secretario General 事務局長である Humberto López Morales のみである。
- 18 García de Paredes (2012:286-289) は、この辞書の性質を規範的というより記述的であると見ている。この辞書には、"ambas formas son igualmente correctas", "también puede decirse o escribirse" などの選択を回避する表現が散見される。
- 19 "*El buen uso del español*, ante todo, un libro de norma lingüística."
- 20 ASALE ウェブサイト: "El presidente nato de la Asociación y de la Comisión Permanente es el director de la Real Academia Española (RAE). También forman parte de ella el secretario general, elegido en cada congreso por un período de cuatro años, el tesorero —designado por la RAE— y al menos dos vocales, propuestos rotatoriamente por las distintas academias."

参考文献・参考ウェブサイト

- Álvarez de Miranda, P. (1995): "La Real Academia Española", Seco y Salvador coord., 269–280.
- Bello, Andrés (1847 [2004]): *Gramática de la lengua castellana destinada al uso de los americanos*, Madrid, Edaf.
- Del Valle, J. ed. (2007): *La lengua, ¿patria común? Ideas e ideologías del español*, Madrid, Vervuert Iberoamericana.
- \_\_\_\_\_ (2013): *A Political History of Spanish*, Cambridge University.
- García Folgado, M. J. (2011): "La gramática española de 1770 a 1800", Gómez Asencio, J.J. dir., 261-284.
- Gómez Asencio, J.J. (2002): "El prólogo como programa. A propósito de la GRAE de 1771", *Actas del V Congreso Internacional de Historia de la Lengua Española*, Madrid, Gredos.
- \_\_\_\_\_ (2008): "El trabajo de la Real Academia Española en el siglo XVIII (y después)", *Península. Revista de Estudios Ibéricos*, 5, 31-53.
- \_\_\_\_\_ (2009): "De 'gramática para americanos' a 'gramática de todos'", *Revista argentina de historiografía lingüística*, I,1, 1-18.
- \_\_\_\_\_ dir. (2011): *El castellano y su codificación gramatical, III. De 1700 a 1835*, Burgos, Instituto castellano-leonés de la lengua.
- Lapesa, R. (1996): *El español moderno y contemporáneo*, Barcelona, Crítica.
- Lázaro Carreter, F. (1972): *Crónica del diccionario de autoridades (1713-1740)*, Discurso leído en la Real Academia Española, PDF.
- Lebsanft, F. et al. eds. (2012): *El español, ¿desde las variedades a la lengua pluricéntrica?*, Madrid, Vervuert Iberoamericana.

- Lodares, J. R. (2002): *Lengua y Patria*, Madrid, Taurus.
- López García, A. (1995): “La unidad del español: historia y actualidad”, Seco y Salvador coord., 3-14.
- López García, M. (2007): “Norma, variedad y enseñanza en la gramática castellana de Andrés Bello”, *Revista Mexicana de Investigación Educativa*, 12, núm. 33, 679-700.
- López Morales, H. (1995): “Las Academias americanas”, Seco y Salvador coord., 281-290.
- Méndez García de Paredes, E. (2012): “Los retos de la codificación normativa del español”, Lebsanft et al. eds., 281-312.
- Real Academia Española (1715): *Fundación y estatutos de la Real Academia Española*, Madrid, Imprenta Real.
- Real Academia Española (1741 [2001]): *Orthographía española*; Estudio de Ramón Sarmiento, Madrid, Agencia Española de Cooperación.
- \_\_\_\_\_ (1771 [1984]): *Gramática de la lengua castellana*; edición facsímil y apéndice documental de Ramón Sarmiento, Madrid, Editorial Nacional.
- \_\_\_\_\_ (1999): *Ortografía de la lengua española*, Madrid, Espasa-Calpe.
- \_\_\_\_\_ y Asociación de Academias de la Lengua Española (2009): *Nueva gramática de la lengua española*, Madrid, Espasa-Calpe.
- \_\_\_\_\_ (2010): *Ortografía de la lengua española*, Madrid, Espasa-Calpe.
- \_\_\_\_\_ (2013): *El buen uso del español*, Madrid, Espasa-Calpe.
- Seco, M. y Salvador, G. coord. (1995): *La lengua española, hoy*, Madrid, Fundación Juan March.
- Senz, S. (2011): “Una, grande y (esencialmente) uniforme. La RAE en la conformación y expansión de la “lengua común””, Senz y Montserrat eds., 9-302.
- \_\_\_\_\_ y Montserrat, A. eds. (2011): *El dardo en la Academia. Esencia y vigencia de las academias de la lengua española*, Barcelona, Melusina.
- Süselbeck, K. (2012): “Las relaciones institucionales entre las Academias de la Lengua Española y su colaboración en la elaboración de la norma lingüística de 1950 hasta hoy”, Lebsanft et al. eds., 257-280.
- 安達 直樹 (2014): 「スペイン語にとって言語の “unidad” とは何か—Nebrija, Bello とアカデミア—」, *HISPÁNICA*, 58, 1-22.
- Asociación de Academias de la Lengua Española, <http://www.asale.org/>
- EL PAÍS 紙, <http://elpais.com/archivo/>
- Instituto Cervantes, <http://www.cervantes.es/>
- Lecturas Sumergidas, <http://lecturassumergidas.com/>
- Real Academia Española, <http://www.rae.es/>